インタビュー

Mech―Mind㈱
社長

楊 培 氏

日本で3D知能カメラの展開加速

産業用ロボの「眼」として採用拡大

Mech―Mind Robotics（中国・北京市）は、独自の3Dビジョン技術とAI技術を有する産業用3Dカメラメーカーだ。ティーチングレスの産業用ロボットシステムなど高度なソリューションを構築するための中核的なコンポーネントとして、グローバルで採用が拡大しており、日本でも引き合いが増えている。今回、日本法人のMech―Mind㈱（東京都港区）にて社長を務める楊培氏に話を伺った。

―貴社の事業について教えて下さい。

楊　2016年に中国で設立されたベンチャー企業で、独自のAIと3Dビジョン技術を融合した産業用3D知能カメラを展開しています。主に産業用ロボットと組み合わせて使用されており、当社の3Dカメラ、画像処理ソフトウエア、ロボット制御ソフトウエアを活用することで、ティーチングレスのロボットシステムを構築することができます。

22年末までにグローバルで累計3000台以上を販売しており、デパレタイジング／パレタイジング、ばら積みピッキング、仕分け、部品供給、組立、接着剤塗布、位置決め、欠陥検査、測定など幅広い用途で活用されています。また米国やシンガポールの投資機関からも融資をいただいており、国際的な支持も得ています。現在、世界各国で事業を展開しており、ドイツや日本にオフィスを有し、22年末から米国、23年初頭から韓国でも事業展開を開始しました。

―日本で事業を開始した時期はいつですか。

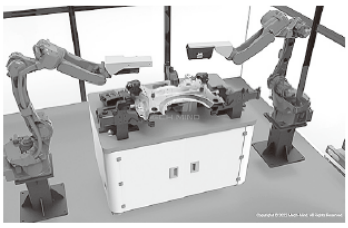
楊　本格的な事業展開は22年から開始しました。まだ本格展開からそれほど経っていませんが、自動車関連企業や物流関連企業などですでに採用いただいています。また、東京都内にトレーニングセンターを整備し、当社の技術を体験いただけるコースと、製造業・物流業の方に向けたコースを設けており、製造業・物流業では段ボール箱のデパレタイジングや金属ワークのばら積みピッキングを体験いただける体制も敷いています。

日本オフィスの人員も積極的に拡大し、先述のトレーニングセンターのような取り組みに加え、アフターサービスや技術サポートに関する体制も強化しています。また、SIer協会（FA・ロボットシステムインテグレータ協会）、中部地域SIer連携会、日本ロボット工業会、日本ロジスティクスシステム協会に入会し、3D知能カメラメーカーとして、ロボットメーカーやロボットシステムインテグレーターとの連携にも力を入れています。

―エレクトロニクス分野での取り組みは。

楊　本社のある中国ではすでに幅広い業種で採用されており、3C（コンピューター、通信機器、家電）などを含むエレクトロニクス関連の製造現場でも活用されています。また、直近ではEMS（電子機器製造受託サービス）世界最大手のフォックスコンともプロジェクトを進めており、こうした経験で得られた成果やソリューションを日本でも今後提案していきたいと考えています。

―新しい製品はありますか。



UHP―140を搭載したロボットのイメージ

楊　高精度3Dカメラ「UHP―140」を開発しました。独自の光学技術と知的アルゴリズムなどを用いることで測定精度は0・03㎜を実現しており、Z軸上における1点の繰り返し精度は2・6μm、エリアの繰り返し精度は0・09μmとミクロンレベルの精度を有します。こうした高い精度によって、反射しやすいワークに対しても優れた画像生成を実現し、高い品質が求められる自動車部品の生産工程における位置、隙間、面差などの検査や測定用途にも使用することができます。また、3Dインラインプロファイル測定器「LNXシリーズ」も開発しており、検査分野において今後日本にも順次導入していく予定です。

―日本における今後の展開について。

楊　22年から本格的な事業展開を開始し、現在様々な引き合いをいただいています。23年はそうした案件を適切に立ち上げるとともに、アフターサービスまでしっかり提供していくことで、お客様の生産性向上に貢献していきたいと思います。そのなかで、代理店をはじめとしたパートナー企業のネットワーク網も拡大していくことで、23年における日本市場での事業規模を前年比2倍以上にすることを目指したいと思いますが、まずは日本でしっかりとしたサービスを提供できる体制を構築していきたいと考えています。

当社は日本市場を非常に重要視しており、先述のように日本におけるサポート体制も整備していますので、もし産業用3Dカメラに関してお困りの方は気軽にお声がけいただければと思います。また、少し先になりますが、10月18～21日にポートメッセなごやで開催される「メカトロテックジャパン2023」や、11月29日～12月2日に東京ビッグサイトで開催される「2023国際ロボット展」などへの出展も予定していますので、そうした場を通じて当社の技術を感じていただき、生産性向上に向けた取り組みなどについてぜひお話しさせていただければと思います。

（聞き手・副編集長　浮島哲志）